

第4章 軽井沢モダンの提起

次の100年に向けて軽井沢のもつ風土資産のすべてを再投資し日本の未来文明を操るアトリエとして、風土自治を考えるのに相応しい町となるための具体的な基準が必要であり、新しい価値に基づく未来志向のテーマ立てが求められます。ここでいう軽井沢モダンは、ウィリアム・メレル・ヴォーリズやアントニン・レーモンド、吉村順三や宮本忠長らによる内外、新旧の建築デザインを軸に展開すると同時に、堀辰雄や立原道造の明るく澄んだ和的叙情性にもつながる感覚です。

春浅い高原の緑のような、淡く渋い風合い…、まち全体の公共デザインに流れる基調を、工芸デザイン、食文化、ライフスタイル一般へと拡大して軽井沢モダンを追求してはどうでしょうか。それは未来の地場産業の母胎です。

そこで軽井沢地域を特徴的な5つのエリアモデルに、それぞれに軽井沢モダンを形成するデザインの具体策を例示し、近未来から22世紀へのまちづくり、地域づくりの参考となるよう問題提起をします。

(1) 旧軽井沢地区における歴史と伝統のデザイン

——「美しい村」の未来へむけて——

浅間石の石垣としっかりとれた苔の庭に囲まれてたたずむ木造別荘群は、高原保養都市軽井沢のシンボリックな存在ですが、残念なことに老朽化が進んで建て替えられたり、世代が代わって放棄されるケースも多く、替わって小割の別荘地やマンション型別荘が登場して原風景が破壊の危機に瀕しています。保有のための制度作りや、所有者・購入者の理解と協力のための支援が必要です。また旧軽井沢地区に点在するキリスト教系教会や寺社など、宗教関係の施設は軽井沢の歴史を特徴づける文化財でもあります。

旧軽銀座の賑わいに清々しい水を流し、これに直交するように深い森に包まれた祈りの空間を配しながら、その交点に居心地の良いまちニワとしての小広場をもうけましょう。こうして、野バラとアカシアが点在する「美しい村」の渋い透明を継承し、発展して軽井沢モダンが型になります。

(2) 文化拠点としての新軽井沢のデザイン

——アートも建築も、風土の^{ひだ}襞から生え上がる——

軽井沢の風土は、多くの文人墨客を輩出し、一方では多くの美術館を抱えて古今東西の芸術作品の宝庫ともなっています。

また 2005 年の大賀ホールの開館以来、世界の音楽ファンの注目を集め、新軽井沢エリアを中心に、文化の熱気が沸き上がっています。

一方で近代の諸芸術はアート、非アートの境界が曖昧になるなか不安定でダイナミックな感動の揺らぎが起きており、文化や芸術の高エネルギー反応のつぼとしての軽井沢から発する創造性と感動は、新しいスタイルのおもてなしでもあります。

こうした文明的な流れに沿って新しい芸術・文化祭を提起したり日本の古典芸術との接点を探るなどして、軽井沢モダンを象徴する企画も魅力的です。

このような展望に立つとき、この地区は軽井沢物語の始まりに相応しい玄関口ステーションフロントとして思いきった転換が望まれます。

軽井沢駅前から矢ヶ崎公園に至る一帯は、高原性の緑の大地の中に個性的な軽井沢モダンの建築、橋、道、そして樹木までもが響き合い、全体が国際会議場の立地にふさわしいアートガーデン^{※13}になるように提案しました。アートも建築も道もそれぞれの固い殻から解放されて風土に溶け込みます。そのようなランドスケープのなかに、数多くの美術館への誘いとなるゲートミュージアム^{※14}を配置してはどうでしょう。

(3) 生活拠点としての中軽井沢の重み

——蘇るふるさと、歩け！沓掛、浅間が見てる——

国の人口推計によると、2040 年の軽井沢町の人口は、2,000 人余りの減少と予想されています。国民総人口が1億 700 万人余りまで落ち込む予想を前提とすれば、まだまだ元気のある自治体グループに入っていますが、入込客の動向いかんでは油断できません。

用語解説

※13：アートガーデン

新軽井沢のデザインの考え方を表現した言葉。駅前から矢ヶ崎公園の整備では、建築や街路、ストリートファニチュアやパブリックアートなど、大小様々な要素を一体的にデザインし、庭のような美しいまちを目指す意味が込められている。

※14：ゲートミュージアム

現在、軽井沢町には多くの美術館などがあり、数の多さとレベルの高さは日本でも際立っている。住民や来訪者がこれらの芸術・文化に触れやすくなるように、それらへの案内機能を持つ施設を構想している。

住民の4分の1が集中する中軽井沢エリアは生活者ゾーンとしての拠点性が顕著であり、他のエリアとは異なる生き残りの手法をさぐる必要がでてきます。役場、病院、学校、駅と図書館、郵便局、金融機関、商工会館や各種商業施設、日常的飲食店などなど…。

第一テーマの高原保養都市とは全く別の顔の地方都市の中心街、コンパクトシティのモデルでもあります。浅間山と湯川を拠り所にした生活者のための歩行・自転車生活圏をどうデザインするか。これを皆で勉強する未来研究センターとしての「22世紀風土フォーラム」のテーマとして考察してみてもはどうでしょうか。

国道より北の街区を流れている沓掛用水は、未来の中軽井沢を決める大事な資源です。網の目状にながれる水の広場は、ふるさと沓掛の新しい顔になります。

(4) 歴史街道としての追分ルネッサンス

——転生する宿場のおもかげ——

外国人の手によって別荘地として開発された100年以上前、江戸時代から中山道の宿場町として栄えていた軽井沢町、その中心になっていたのが追分宿です。中山道と北国街道が分岐する交通の要衝として、旅籠や茶屋などが百軒近くも軒を連ねていたということで、追分こそが軽井沢の賑わいの原点だったともいえます。追分宿郷土館が整備され、近年は街路整備や駐車場、休憩所が整い、街道筋の面影が戻りつつありますが、休業や閉店を余儀なくされる商店、空き家化する住宅もあり全体のまち並み整備は終わっていません。

商店の誘致を含めた建造物対策、生垣や板壁などによるまち並み修景に加えて、歴史街道に相応しい、歩いて楽しむ追分宿のルネッサンス事業に向けて、民間資本の導入と行政からの支援が合体したまちづくり会社の設立が期待されます。

美しく年を重ねるこの場所は、芸術・文学に心惹かれる人々を引きつける磁場でもあり、宿場通りと分去れを歩道でつないで一体化することも街道復活の方策の一つです。

(5) スポーツと農業のセンターとして先駆ける南地区

——生命の豊饒、はじける元気——

軽井沢町が目指す高原保養都市にとって、スポーツは先行き有望

なテーマであり、その中心的役割を果たすうえで、風越地区に集結する各種施設を有効に結びつけ、全国に向けてその存在を発信することが大切です。

とりわけカーリングやアイスホッケーなどのウインタースポーツを通年スポーツに切り替えて活動の幅を広げていくうえで、軽井沢に集まる期待はかなりのレベルにあります。

さらにジュニア、シニア、レディースなどの分野に広がるスポーツ参加への熱意は、2020年の東京オリンピックを頂点に、ますます高まることは確実で、高原保養都市の特性と合わせて考えるとき、軽井沢の新しい魅力と役割は極めて大きいものと考えべきでしょう。

このような期待に応えるため、植物園と野球場を発地へ移して余裕を生み出すことにより産まれる上品な緑の遊歩道とクラブハウスは、「風越スポーツパーク」の交流と社交の場所になります。

また風越に隣接して創られる農産物等直売施設「軽井沢発地市庭」は物販施設の域を超えて集約型・参加型農業経営のセンター的役割を担うほか、軽井沢モダン好みの新しい食文化を提案する実験レストランの併設が望まれます。

周辺の里山や鳥類の楽園となっている休耕田湿地を含めた全体を「発地里山パーク」と位置付け、風越から発地へ移転する植物園は、昆虫、魚類、鳥類、ほ乳類を含むあらゆる里山生態のインキュベーター^{※15}（養育苗圃センター）にするのが良いでしょう。さらにまた里山斜面の林相を改良し、サクラ、コブシ、モミジなどの景観林を育成する他ホウの木、カヤなど工芸材料や食用林産物生産の可能性を探りましょう。

また、人と動物がふれ合う羊牧場や馬事公苑等の施設の開発は心と身体の健康を育む「里山セラピー^{※16}」の場としても相応しく、いざという時には食糧基地として元に戻すことも可能な軽井沢の自然財産と考えるべきです。

用語解説

※15：里山生態のインキュベーター

インキュベーターは「孵卵器」や「保育器」などを指す用語。発地の新しい植物園が植物の展示機能に留まらず、豊かな自然環境を活用し昆虫から動物を含む里山の生態を育む場所になるという、新時代の植物園を目指すことを表現している。

※16：里山セラピー

発地地区の豊かな自然環境を活かした「発地里山パーク」のなかに、自然散策路やホーストレッキングといった自然や動植物と親しめる憩いと癒し（セラピー）の場を創出し町民と来訪者の交流も図りながら里山全体で心身のバランスをとり直すこと。